

# PTA と 成人 教育 (II)

杉 村 房 彦

## PTA and Adult Education (II)

Fusahiko SUGIMURA

はじめに——問題の所在と研究課題

### I. PTA活動のなかで成人教育活動はどのような意味と位置をあたえられているか

#### 1 文部省が期待するPTA活動と成人教育活動

(1) 「手引」と「第一次参考規約」におけるPTA像

(2) 「第二次参考規約」によるPTA像の確定と成人教育活動の変容・縮小

#### 2 単位PTAにおける成人教育活動のたてまえと実態

(1) 高唱される“成人教育活動の推進”——規約からみた教育・学習活動の位置

(2) “一割成人教育”にも参加できない父母会員——「会計報告」と「会務報告」からみた教育・学習活動の実態

① 「会計報告（支出の予算・決算）」では

② 「会務報告」では

(以上第20巻)

### II. 父母のPTA観と成人教育活動への期待—父母会員の学習要求

本章の課題

#### 1 教育・学習活動にたいする父母会員の大きな期待

#### 2 父母会員が考えるPTAの任務——PTAにたいする期待のたてまえと“ほんね”

(1) PTAの任務についての正しい認識

(2) PTAにたいする期待の“ほんね”——「わが子の勉強としつけを」

#### 3 学習要求の実体とその構造

次章への問題意識

(以上本巻)

### III. (PTAの成人教育) 振興のためのいくつかの提言——PTAに客観的に期待されている役割— 歴史的任務と「PTAの成人教育」活動 教育・学習活動振興の可能性といくつかの障害 とくに構造上・活動上の障害克服のための提言 などについて)

## II. 父母のPTA観と成人教育活動への期待—父母会員の学習要求

**本章の課題** 前章で概観したように教育・学習活動（以下学習活動と略）はほとんど行なわれていないというのが多くのPTAの現実であるが、父母会員や教師会員はこのような状況を「よし」としているのだろうか。一般的にいえば会員の要求や期待に反する状況が長いあいだ存続することはできないはずであり、じっさい、学習活動がさかんなPTAではとくに父母会員の要求や熱意がなんらかのかたち・程度において組織化され、学習活動を支えている。本章では、調査結果にもとづいて父母会員のPTA観（PTAの任務についての考え）と教育・学習要求（PTAにおける学習活動への期待の強弱や内容）を明らかにし、両者の関係を考察しながら以

上の疑問に答えようとするものである。

<補注> これは社会教育ゼミナールの学生諸君を調査員として本年 (S. 44年) 1月に当県<sup>そお</sup>嶺南郡の T中学校 P T A の父母会員を、同7月に鹿児島市のM中学校 P T A の父母会員を調査対象として行なった面接調査 (結果) である。

T中学校は準へき地に立地し校区民の大部分は農業に従事している。同校区内には「農業構造改善」事業のパイロット地区に指定された部落もふくまれるが、一般に低所得の農家が多く生活保護や教育扶助を受けている家庭も多い。したがって農閑期の出稼ぎや青年層の離農 (県外就職) も多い。またパイロット地区をふくめて経営規模や所得の格差も顕著である。他方、M中学校は鹿児島市の中心に近い新興住宅地域に立地する新設校で、校区民の大部分は公務員その他の給与所得者であり、父母の学歴構成は高いいわゆる“教育熱心”な地域であるといわれている。T中学校の高校進学率は54%であるがM中学校のそれは91%と非常に高率である。なお県平均のそれは73%である (いずれも S. 43年度卒)。

調査はいずれも同一のテーマ・質問 (3テーマ・65~68質問) で行なった。質問については自由回答質問法、プリコーディッド自由回答質問法、回答選択的質問法および序列的質問法のすべてを用いたが、主として前二者を採用した。テーマは、①子どもの将来にたいする親の希望、②親の学

<付表 1> 調査対象者数およびその属性

		都 市 P		農 村 P		
調 査 対 象	抽出数	107人	— %	63人	— %	
	回答者数&回答率	88	82	62	98	
	内 訳 {	夫	12	14	29	47
		妻	76	86	31	50
その他		0	0	2	3	
P T A の 役 職 者	役職者数&回答者数にたいする比	14	16	15	24	
	うち (	学級役員	6	—	5	—
		地区(部落)役員	0	—	5	—
学 歴 構 成	小学校・旧高等小学校・新制中学校卒	24	27	57	92	
	旧制中(女)学校・新制高校卒	48	55	2	3	
	旧制高校・旧制専門学校・師範・新短大卒	11	13	3	5	
	新&旧大学卒	0	0	0	0	
	その他&不明	5	6	0	0	
年 令	平均年令	41才		45才		
	(	最高年令	58才		65才	
		最低年令	30才		27才(長男)	
世 帯 主 の 職 業	公 務 員	35人	40 %	2人	3 %	
	(うち教育公務員)	(11)	(13)	(1)	(2)	
	その他の給与所得者	37	42	※18	29	
	自 営 者	11	13	59	95	
	(うち農業自営者)	(1)	(1)	(55)	(89)	
その他&無職者	5	6	1	2		

<注> 以下M中校P T Aを「都市P」、T中学校P T Aを「農村P」と略称

「学歴構成」については、若干名の中退者を含む

※の18人は、農業自営者にふくまれている世帯主が給与所得者として兼業しているもの

校教育にたいする関心や理解と、教育権認識との関係、③以上とP T Aにたいする考えとの関係、および以上の認識や理解の変化とP T Aにおける教育・学習活動との関連、の三つである。

調査対象の抽出は、T中学校P T Aについては同校区から産業や生活に特徴的な7部落を有意的に選び、その部落のP T A父母会員から2人に1人の割合で、M中学校P T Aについては全父母会員から5人に1人の割合で、名簿によって等間隔無作為抽出した。なお、いずれも「家族のうちP T Aの会合などによく出会う人」と限定したので、とくにM中学校P T Aの場合じっさいに面接したものの多くは母親であった。

調査対象者の数および属性は付表1のとおりである。

### 1 教育・学習活動にたいする父母会員の大きな期待

**学習活動への高い参加率** まず第10表をみていただこう。P T Aの行事や活動を六つの領域に

<第10表> P T Aの行事・活動への参加状況  
～「よく参加・協力する」と「まあ協力するほうだ」の合計が全回答に占める率～ (%)

P T A		都市P	農村P
領域			
1	行事(レクリエーションなど)	20	47
2	学習活動(講演など)	32	58
3	文化活動(同好サークルなど)	3	15
4	奉仕活動(交通安全など)	2	29
5	教育運動(役場への陳情など)	2	24
6	寄付・勤労奉仕	35	94
平均		16	44

<注> 100% = 都市P 88人, 農村P 62人 ただし「平均」については、100% = 都市P 528人, 農村P 372人

わけ、それぞれへの参加(協力)の程度を回答例(①よく参加・協力する ②まあ協力するほうだ ③あまり協力しないほうだ ④ほとんど参加・協力しない ⑤参加・協力したことがない ⑥そのような活動は行なわれていない ⑦無回答)によって答えてもらった。そのうちもっとも参加(協力)状況がよいものの合計(回答例①と②の計)を表にしたものが第10表である。この表から明らかのように、都市P、農村Pのいずれにおいても「寄付・勤労奉仕」を論外とすれば、「学習活動」は参加状況がもっともよい領域である。

「寄付・勤労奉仕」を論外とすれば、「学習活動」は参加状況がもっともよい領域である。

<付表2> P T Aの例会への参加状況  
～「ほとんど欠席しない」と「よく出会うほうだ」の合計が全回答に占める率 (%)

P T A		都市P	農村P
例会			
総会		55	89
学級P T A		68	79
地域(部落)P T A		—	92
平均		61	87

<注> 100% = 都市P 88人, 農村P 62人。ただし平均については、100% = 都市P 176人, 農村P 186人

<補注> もっとも、この数値を考察する場合若干の補正が必要である。まず都市Pについては、「参加したことがあった」という過去の経験とか「行なわれれば参加したい」という願望などが、これにふくまれていると考えられてよい。なぜならこのP T Aでは、発足以来「学習活動」らしいことは行なわれていないからである。先にのべたようにこのP T Aは人口流入が激しい新興住宅地域に立地する中学校のP T Aであり、また会員の多くが住居異動が激しい公務員やサラリーマンの家族である(付表1参照)ことなどを考えると、転入以前のP T Aでの経験を回答したものもいると考えられる。またこの地域には夫婦ともに働いている家庭も多く、参加したくてもできないという会員もいる。農村Pについては付表2にしめすように出席率がきわめて高いP T Aの例会にあわせて学習活動が行なわれていると

いう事実——たとえば、農村のPTAに広くみられることだが、学級PTAの日に講演会を行なう、など——を、指摘するだけにとどめよう。

**非常に大きい「学習活動」への期待** **第11表**によれば、学習活動への良好な参加状況は学習活動への期待の大きさに支えられているということになる。学習活動を「しないほうがよい」「する必要はない」と考えているものは、両者を合計しても都市P、農村Pのいずれにおいても1割にみえない。しかも否定的回答（回答例4と5）をよせたものにその理由をきくと、たとえば「多忙」だからとか「共同学習」の「共同」ということばに疑問をもっていることなどがその理由であって、学習活動そのものを否定するものはいない（**第12表**参照）。他方、「PTAはまず学習組織だ」と、PTA諸活動のなかでもとくに学習活動を強調するものが、いちじるしく高い割合を占めている。以上の回答結果でみるかぎりPTAの学習活動にたいする父母会員の期待はきわめて大きいといってよい。

＜第11表＞ 「PTAとは基本的に『親と教師の共同学習組織である』と思いますか」への回答結果

		(%)	
回 答 例		都市P	農村P
1	思う。PTAはまず学習組織だ	67	50
2	それが第一だとは思わないが、いろいろのことをするにはやはり共同学習は必要だ	5	15
3	やってもよいが、PTAの基本任務だとは思わない	9	10
4	共同学習の組織である必要はない	0	0
5	思わない。学習しないほうがよい	7	5
6	わからない	11	15
7	その他 ( )	0	6
8	N. A.	1	0

＜注＞ 100% = 都市P 88人、農村P 62人

＜第12表＞ 共同学習組織であることを否定した理由  
(第11表で回答例4と5に回答したものへの質問)

		(人)	
理 由	都市P	農村P	
忙しいので……。	1	1	
父母と教師に意識の差があるので共同学習はなりたない	3	0	
質問が大げさだ。学習は必要である	1	0	
PTAのなすべきことは、それだけではない	0	1	
N. A. および「質問の意味がわからない」と答えたもの	2	1	

＜注＞ 回答例4に答えたものは都市P、農村Pともになし。回答例5に答えたものは都市P 6人、農村P 3人。都市Pの合計が7人になるのは、1人で2種の理由をのべた者がいるためである。

このような期待の大きさは、「PTAの任務はなにか」という一般的な質問への回答にもしめされている。**第13表**をみていただこう。これはPTA問題に関する東京都の世論調査の一部を借りて回答例をつくった質問への回答結果であるが、**第11表**と同じようにこの表も、非常に多くの

父母会員がとくに学習活動の領域にP T Aの独自の任務があると考えていることをしめしている。

<第13表> 「P T Aの任務だと思うものを、一つだけ選んでください」への回答結果 (%)

	回 答 例	都市P	農村P
1	学校の施設や用具をととのえるために、会員が学校に財政的援助をする	1	15
2	父母と先生がともに勉強しあって子どもの教育について理解を深め、自分自身の向上に役立てる	57	34
3	学校の教育計画に協力し、担任の先生からの注意をよく守るようにする	11	13
4	教育について理解を深め会員以外の人びとも訴えて世論を喚起したり、政府や関係当局に働きかけたりして、子どもたちがよりよい教育を受けることができるように努力する	23	23
5	「この中にはない」「わからない」およびN. A. と2個以上に回答したもの	8	16

<注> 100% = 都市P 88人, 農村P 62人

<補注> この第11表にあらわれた回答は、P T Aの目的・任務一般についてあれこれ質問したあとで行なった質問への回答である。したがってもしこの質問文に“ある回答”を誘導する傾向性があったとしても、以上のような質問のしかたによってその傾向性はほとんど消滅していると考えてもよいのではないだろうか。

**期待の大きさと低調な現状との矛盾** だが、このような学習活動への期待をそのまま学習活動への意欲と考えてよいであろうか。あるいは父母会員一人ひとりとはきわめて高い意欲をもっているにもかかわらず、前章でのべたように今日大部分のP T Aの組織と活動は、学校の「外」にも「内」にも学習活動への“動機づけ”を成立させえない構造になっているので、期待というかたちになってしまったのだと解釈してよいだろうか。学習活動にたいする期待の大きさにくらべてあまりに低調な現状はいくつかの疑問を産むが、これらの疑問はおそらくP T Aそのものにたいする父母会員の期待を解明しなければとけないであろう。

## 2 父母会員が考える P T A の任務——P T A にたいする期待のたてまえと“ほんね”

**“自分の子”と P T A** 「自分の子は成績がいいからP T Aに行く必要がない」とある母親が語っていたが、この発言をつらぬく考え方・論理はこの母親だけのものだろうか。この発言の論理をそのままにしていくつかのことばをいれ替えれば、たとえば「自分の子は成績が悪いからP T Aに行かねばならない」とか「自分の子どもにもっと勉強してもらいたいからP T Aに行っているいろいろ聞きたい」と改めれば、ほとんどすべての父母会員のP T A観（P T Aの存在意義や任務などについて考え方）になってしまうということはないだろうか。

### (1) P T A の任務についての正しい認識

**良好な例会出席率と高い P T A 評価** 付表2にしめしたようにP T Aの各例会への出席率はたいへん良好である。P T A 評価の高さが良好な出席率をある程度説明してくれる(第14表参照)。

&lt;第14表&gt; 「PTAには行ってよかったと思いますか」への回答結果 (%)

回 答 例		都市P	農村P
1	よかったと思う	49	61
2	よいことも悪いこともある	1	3
3	特別よいとか悪いとかいうことはない。	22	8
4	入会したいからはいったのではないので、とくに考えたこともない。	20	23
5	入会したので困ったことや悩みがふえた	0	3
6	「やめたい」と思っているくらいだ	3	0
7	N.A.	5	2

<注> 100% = 都市P 88人, 農村P 62人

**父母会員の正しいPTA観** 父母会員はPTAの存在意義(目的・任務・役割など)を正しく認識している。まず第15表をみていただく。これは文部省の「第一次参考規約」の「目的」十カ条を平易な文章につくりかえて回答例とした質問への回答結果だが、期せずして都市P、農村Pとも回答率第1位から第3位までは同じ回答例がなっている。第1位と第3位の回答例はほぼ同じ内容のものであり、まず子どもの健全・幸福な成長のためには父母や教師の協力だけでなく社会成員すべての努力が必要であること、第二にそのような社会成員すべての努力はまず健全な環境の醸成に向けられるべきだが、それにとどまらず積極的に福祉の増進をはかることに向けられるべきであること、第三に、第2位の回答例にしめされるものだが、上述の努力を前提としてとくに訓育については父母と教師がもっとも責任をもたねばならないこと——父母会員のPTAの任務観をほぼこのようにまとめてよいだろう。回答例4にある「訓育」ということばを全面的な人間形成と解釈すれば、父母会員はPTAの任務を正しく認識しているといつてよい。それはたとえば成人教育一般の課題(回答例2)や、かならずしもPTAの独自の任務とはいえない活動領域(回答例9や10)が、低位の回答率になっていることにもうかがえる。

&lt;第15表&gt; 「PTAの目的としてふさわしいものに○をつけてください」への回答結果 (%)

回 答 例		都市P	農村P
1	家庭・学校・社会における子どもの福祉を増進する	③ 52	③ 53
2	国民の権利と義務について父母の学習をさかんにする	26	34
3	民主教育について理解を深め、民主教育の発展に努力する	43	44
4	子どもの訓育について父母と教師が協力する	② 81	② 60
5	社会の人びとと父母と教師の協力で子どもの成長によい環境をつくる	① 85	① 63
6	学校の施設や設備をととのえる	44	45
7	政府・関係当局が子どもの保護・健全育成のために法律などをつくり、またそれを正しく実施することに協力する	34	40
8	政府・関係当局が教育予算の適正化に努力するように要求する	33	48
9	村や部落(地域)の人びとのための社会教育に協力する	27	37
10	国際理解と親善に努力する	14	23
11	N.A.	5	8

<注> 100% = 都市P 88人, 農村P 62人, 合計が100%をこえるのは、2個以上の回答を許したため。

<第16表(A)> 「たとえば『教育予算をもっとふやせ』と教育委員会に交渉したり『子どもを公害から守ろう』とよびかけて住民の署名を集めて、関係当局や会社・工場に交渉することはP T Aの任務だと思いますか」への回答結果 (%)

	回 答 例	都市P	農村P
1	思う	49	65
2	思わないがやむをえない	9	2
3	すべきでない	14	15
4	わからない	22	13
5	そ の 他 ( )	5	6
6	N.A.	2	0

<注> 100%=都市P 88人, 農村P 62人

予算をもっとふやせ」とか「子どもを公害から守ろう」などの自治体や企業にたいする要求運動に否定的回答(回答例3)をしているものは、都市P, 農村Pのいずれにおいても1割余にすぎない。半数あるいはそれ以上のものがP T Aの当然の任務と考えている。しかも回答例3(「すべきでない」)に答えたものがのべた理由および回答例5(「その他」)に答えたものがのべた説明の多くに、「他の機関や立場の人びと(たとえば教育委員会や市町村当局, 地方議会や議員, あるいは政府などがあげられていた)がすべきことだから」とか、「P T Aだけの任務ではないから」

### P T A は教育運動の主体である!

つぎに第16表(A)と第17表をみていただこう。この二つの表は第15表を肉づけする質問への回答結果である。たとえば第15表では回答例5や1が上位を占めているが、具体的にはどのような努力(活動)が個々の父母会員に想定されているのか、あるいは回答例6と8との関係はどのように認識されているのか、を知ろうとするものである。

第16表(A)に明らかなように「教育

<第16表(B)> 関係当局や企業への要求・交渉を否定した理由  
(第16表(A)で回答例3に回答したものの質問)

理 由	都市P	農村P
交渉してもきいてもらえないから	2	0
P T Aだけの任務ではない。地域住民の任務だから	1	1
他の機関や立場の人びとがすべきことだから	5	3
P T Aの任務ではない(すべきでない, 無関係)から	4	0
そ の 他	1	3
N.A. およびわからない	0	2

<注> 回答例3に回答したものは、都市P 12人, 農村P 9人, 都市Pの合計が13人になるのは、1人で2種の理由をのべたものがあるためである

<第16表(C)> 第16表(A)で回答例5(「その他」)に回答したものがのべている説明

都 市 P (該当者4人)	農 村 P (該当者4人)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・してもよいが強制はいけな</li> <li>・思いたくない</li> <li>・P T Aだけの責任ではない。地域がすべきだ。</li> <li>・N.A.</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談ならよい</li> <li>・それは教育委員会の仕事だ。P T Aには暇はない。</li> <li>・今までしたことがない</li> <li>・町会議員の任務である</li> </ul>

